

聖書：マタイ 26：47～56

説教題：預言者たちの書が成就するため

日時：2020年8月9日（朝拝）

イエス様は今日の箇所ですぐに敵対する者たちの手に渡されます。前回イエス様はゲッセマネの園で「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください」と祈り、激しい祈りの格闘をされました。そして三度の祈りを経て弟子たちのところに戻り、彼らに話している最中にイエス様を捕らえようとする人たちが現れます。そしてもう少し何かがあるかと思いきや、あっという間にイエス様は引いて行かれます。重大な瞬間は、あまりにもあっけない幕切れとなります。マタイはそんなイエス様逮捕の場面でイエス様の3つの言葉を記しています。一つはユダに対して、一つは一緒にいた弟子に対して、もう一つは群衆に対して。マタイはこの3つの言葉を通してイエス様の逮捕はどういう性質のものであったかを明らかにしています。その3つの言葉に順番に注目しながら今日の箇所を読んで行きたいと思います。

まず一つ目はユダに対する言葉です。彼は突然現れた群衆の先頭に立っていました。彼はこの章 25 節の時点ではまだイエス様や他の弟子たちと一緒にいました。いつ席を外したのかマタイは記していませんが、ヨハネの福音書を見ると、それは最後の晩餐の間であったようです。他の弟子たちはユダが会計係をしていたので、何か必要なものを買に行ったり、あるいは貧しい人たちに施しをするために出て行ったかと思っていたようです。ところがやっと帰って来たと思ったユダは、その背後に大勢の群衆を従えていました。

ユダはイエス様を裏切る際、口づけという方法を用いました。彼は前もって人々と合図を決め、「私が口づけをするのが、その人だ。その人を捕まえるのだ」と言っていました。時は真夜中、暗い森の中。イエス様を良く知っている人でないと見間違える危険があります。当時は今日のように写真があるわけではありません。イエス様の名前は聞いたことがあっても、その顔を知らない人は沢山いたと思われます。ですからユダがこの方法で、この人がイエスだと確定する。そしてその口づけを合図に、待機していた一団が一斉にイエス様を取り押さえにかかる。そのような段取りでいたわけです。

ユダはすぐにイエス様に近付き、「先生、こんばんは」と言って口づけします。口づけは親愛の情を現す行為です。しかし当時、弟子である者から師に対してこのようにするのは失礼なやり方だったようです。それにしても「捕まえるべきイエスはこの人だ！」と示すだけなら他にも方法はあったのではないのでしょうか。本来、親しさや尊敬、また愛情を表す特別なこの行為をもってイエス様を敵の手に渡すことにユダは何の良心の呵責も感じなかったのでしょうか。ユダはこうして最も劇的な方法でイエス様を裏切ろうとしたのです。イエス様をだまし、イエス様が大きなショックを受けながら逮捕されることを楽しみとさえしたわけです。

このユダにイエス様はどう応答したでしょう。まずイエス様は彼に「友よ」と呼びかけました。そして「あなたがしようとしていることをしなさい」と言われました。これはどういう意味でしょう。ここは実は訳が難しいところのようです。第三版までは、「友よ。何のために来たのですか」と訳されていました。しかしたとえ第三版までのように訳すとしても、イエス様はユダがどういう目的でここに来たのか知らなかったわけではありません。イエス様はすべてをご存知でした。むしろ主導権をもって一連の出来事を導かれたのはイエス様であるというマタイのメッセージを捉えて、今回の訳の方がふさわしいと判断されたのでしょうか。

私たちはこのイエス様の言葉を通して、イエス様はご自分の意志に反して無理やり逮捕されたのではなかったことを知ります。弟子に裏切られ、出し抜かれ、大きな衝撃の内に、哀れな者として敵の手に渡されて行ったのではなかった。むしろイエス様の方から、そうしなさい！とユダに命じることさえされたのです。ここにイエス様の逮捕はイエス様が進んでご自分の身を渡されるという出来事であったことが示されています。

2 つ目は一緒にいた弟子の一人に対する言葉です。人々がイエス様に近寄り、手をかけて捕らえたのを見て、ひとりの弟子が剣を抜き、大祭司のしもべに切りかかり、その耳を切り落としました。これはヨハネの福音書の平行記事から一番弟子のペテロだったことが分かります。彼としては何とかして主を守るために、とこのような行動に出たのでしょうか。彼はこの章の 33 節で「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません」と言っていました。また 35 節で「たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません」と言っていました。

このように行動したペテロにイエス様は何と言われたのでしょうか。「よくやった！さすがわたしの一番弟子だ！」と言ったのでしょうか。また「後の者たちも彼に続いて、わたしのために戦え！」と言ったのでしょうか。そうではありませんでした。イエス様はペテロに「剣をもとに収めなさい」と言います。そしてヨハネの福音書を見ると、耳を切り落とされた大祭司のしもべを癒されたことが記されています。そして言われました。「剣を取る者はみな剣で滅びます。」これは言い換えれば、暴力はさらなる暴力を生むだけであるということです。しばしばここから絶対平和主義あるいは絶対非戦論を唱える人たちがいます。一切の武力の行使をイエス様は禁じられた、と。しかしローマ人への手紙 13 章にははっきりと為政者には剣が与えられていると言われています。公に立てられたしもべには悪の抑制のために、最終手段としてそれが与えられています。ですからその正しい使用法までがここで禁じられているわけではありません。しかし個人が自分の勝手な判断で剣を用いること（他人の命を奪うこと）を聖書は禁じています。それは神の国を確立する方法ではありません。使徒の働きを見ても、クリスチャンたちは多くの迫害を受けましたが、剣の暴力をもって応答したというような記事はありません。

イエス様は続けてこう言われました。53 節：「それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。」12 軍団という数字はイスラエルの 12 部族あるいは 12 使徒をもとにしたものでしょう。「軍団」という部分には印がついていて、欄外の 53 に「原語『レギオン』。一レギオンは 6000 人編成」とあります。ですから 12 軍団よりも多くの御使いとは、72,000 人以上の天使たちということになります。ここにいたであろう群衆をはるかにしのぐ数です。第二列王記 6 章には預言者エリシャがいのちを狙われ、アラムの軍隊に囲まれた時、一緒にいた若者が「ああ、ご主人様、どうしたら良いのでしょうか」と恐れた時のことが記されています。その時、エリシャが主に向かって「どうか、この若者の目を開いてください」と祈ると、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていたのを若者は見ます。そのような上からの守りがいつもご自分の上にはある。願うならいつでもその御使いたちによって自分を助け出すことが可能である。そのことをあなたは忘れているのか、だから剣を振り回しているのかとペテロを主はいさめられました。

イエス様はそうしようと思えばそれができるのに、そうしない道を進んでおられまし

た。なぜでしょう。それは 54 節にある通り、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が成就しないからです。イエス様がこうして捕らえられ、十字架の死へ引っ張って行かれるのは、必ずそうならなければならないこととして聖書で言われて来たことでした。なぜそうなのでしょう。なぜこのことが必然のことなのでしょう。それはこれ以外には私たちの救いはあり得ないからです。神はこのことを私たちの救いのためにご計画くださいました。罪のない、きよいご自分の御子が私たちの代わりに十字架にかけられ、死ぬことを通して、この方により頼む者たちを救うという道を示して来られました。その御心が実現するためにイエス様はご自分を救い出すことをなさらなかったのです。むしろご自分からそのいのちをささげる歩みへと進まれたのです。

最後 3 つ目のイエス様の言葉は群衆に対するものです。55 節でイエス様は言われました。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。わたしは毎日、宮で座って教えていたのに、あなたがたはわたしを捕らえませんでした。」 イエス様が言わんとしていることは、この時の彼らの行動はあまりに不自然なものであるということです。もしわたしを捕らえるつもりなら、わたしは毎日昼に宮で座って教えていたのだから、居場所もはっきりしているし、簡単にそうすることができたはずである。正当な理由があればの話です。しかしそれが無いから、日中に人々が見ている前では、あなたがたはそうしなかった。そしてこんな夜に、まるで強盗にでも向かうかのようにたくさんの武器を手にしてやって来たのは、これが不当な逮捕だからであるということです。これはあなたがたが不正に行動していることの明らかなしるしであるということです。

しかしイエス様は 56 節で続けて「このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書が成就するためです」と言われました。今述べましたように、敵がしていることは不正な行為です。しかしイエス様はそれに身を委ねられます。なぜかと言えば、このことは預言者たちの書に言われていたからです。このような彼らの悪を用いて神が御心を実現されることは、旧約聖書が語っていたところだったのです。もちろんこれはだからと言って、彼らの罪が軽くなるということではありません。前にも述べたように、彼らはこうすることが神の御心だと知り、神に従おうとして、このように行動したわけではありません。彼らは自分たちの悪い考えによって行動しただけです。ただ神はこのような敵の反抗さえも用いて御心を実現することができる。いやそのことを前もって預言していたというのです。こうして敵対者たちは神の計画実現のために奉仕させられているの

です。ですからこのイエス様の逮捕は敵の勝利ではなく、敵の悪さをも用いる神の驚くべき知恵と力の勝利であったのです。これを見て弟子たちはみなイエス様を見捨てて逃げてしまったと最後に記されます。「たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません」と誓った彼らでしたが、その言葉の空しさがこうして暴露されています。むしろイエス様が 31 節で引用されたゼカリヤ書における神の言葉こそが確かに成就することになったのです。

以上のイエス様の言葉から私たちが知ることは何でしょうか。それはイエス様の逮捕は、突然弟子に裏切られ、ショックを受け、狼狽し、慌てながら、叫びながら、無理やり引っ張って行かれたというものでは決してなかったということです。イエス様が弱くて、抵抗すらできず、悲しみながら、弟子たちを呪いながら、力づくで連れて行かれたという出来事ではなかった。イエス様は逃れようと思えば逃れることができたのに、ご自分を救い出そうと思えばそのことができたのに、その道を行かず、むしろ進んで敵の手にご自分を渡された。そこには何と困難な道があったことでしょうか。イエス様は弟子の一人に裏切られ、しかも偽りの口づけをもって裏切られるというこの上ない屈辱、辱めを味わわれました。また一番弟子のペテロが御心をわきまえず、剣を振り回すという行為に出たことによって、彼をいさめ、必要な後始末をしなければなりません。またご自身は何一つ悪を行っていないのに、人々は強盗でも捕らえるかのような体制で近付いて来て不正に逮捕しました。改めて驚くべきは、このような辱めと乱暴な扱いを甘んじて耐え忍ばれたのは神の御子であったということです。その方がご自分を低めて、私たちの救いのために、このような仕打ちを受けることを良しとされた。そして聖書に従って、十字架上で私たちの身代わりの死を遂げるために、ご自身のすべてを与えてくださったのです。私たちの救いはこのような主の大いなるへりくだりと犠牲と献身とによって成り立っていることを覚えて、今朝、主の前に心から感謝し、額づく者でありたいと思います。

そして私たちもこの主にならって歩む者とされたいと思います。イエス様が歩まれた道は、神こそすべての上にいます絶対主権者であることを見上げて信じる生き方であり、また神の御心に従う道こそ最も確かで究極的な幸いの道であるというものです。私たちにも色々な時があります。悪の力が自分を取り囲んでいるように思える時、また敵対する人々が様々な陰謀を企み、やりたいように動いて成功しているように見える時があるかもしれません。しかし私たちが信じるべきは、そこでもすべての事柄の上にあつて真

に支配しておられるのは神ご自身であるということです。そしてその神は敵の悪さえも用いてご自身の良いみこころを実現されるお方です。ですから私たちにとって最も確かな道は、イエス様のように、聖書の言葉に聞き、聖書に示されている神の御心の道を行くことです。たとえその道は人間的に得策でないように思ったとしても、神はあらゆる状況、あらゆる人間の思いを越えて、ご自身の御心に従う者の上に最善の祝福をもたらしてください。私たちも主にならい、神を信じ、神が命じておられる道に祈りつつ進み、神が奇しい御手をもって必ず導いてくださる最も良い祝福に生かされる者とされて行きたく思います。